

生涯スポーツとしてのニュースポーツ「木球」

— 第1回木球世界大会に出場して —

福島大学行政社会学部 新谷崇一

1. はじめに

私が初めて「木球」を知ったのは、1992年6月、台湾で開催された「The International Conference on Sport Science at TAIPEI」での出会い以来共同研究者として交流を深めてきた周仲忽教授を通してであった。

周教授は1997年に国立台湾工業技術学院（現、国立台湾科技大学）を退官され、同年中華民国木球協会推广委员会主任委員に就かれていた。私は周教授から、アジア各地はもとより世界各地に普及しつつある木球を、是非日本でも普及させたいとの要望を受け、協力しようと考えていた。その打ち合わせのために来日された周教授により1998年12月3日、日本で初めて福島市で木球が紹介された（写真1）。日本初の木球紹介とあって、マスコミ各社でも取り上げられ、周教授も満足されて帰国した。



写真1 木球日本初披露

その後1999年3月20日、福島市教育委員会保健体育課の後援により、周教授をはじめ台湾木球協会理事長翁明輝氏、マレーシア木球協会会長郭増嘉氏を講師に招き、福島市体育協会会員及び体育指導委員を対象とした講習会が開催された。その模様は、地元マスコミ各社をはじめ全国紙の関東版やスポーツ紙にも取り上げられ、一躍注目を浴びるようになった。

その台湾生まれのニュースポーツ「木球（もっきゅう）」は英語で Woodball（ウッドボール）と呼ばれ、1993年台湾の翁明輝氏によって考案された。

翁氏はゴルフを趣味としていたが、ゴルフは時間的にも費用的にも負担が大きいので、もう少し手軽にできるものはないかと考えあぐねた結果考案されたのが木球である。また、翁氏の父上は病弱気味で、激しい運動はできないがスポーツが大好きなために、父上の体力に合うようなスポーツはないものかという親孝行な気持ちから生まれたものでもあるという。

木球はゴルフをコンパクトにしたようなスポーツで、ルール、技術、ゲームの進め方、コースはゴルフに似ている。用具はマレットというボールを打つクラブ、ソフトボール位の大きさのボール、そしてゴールとなるウィケットの3点からなる（写真2）。



写真2 木球用具

特徴的なのはマレットのヘッドの部分とウィケットの支柱がビール瓶の形をしていることと、2本の支柱の間にワイングラスの形をした木のコップが逆さまに吊りしてあることである。これらの用具はビール好きの翁氏の遊び心から生まれたものであろう。

コースは35m以下のショートコース、36～65mまでのミドルコース、66～100mまでのロングコースの12コースあり、全長で500m位とされている。その中には、ショートコース、ロングコースがそれぞれ2コース、また右ドッグレッグ、左ドッグレッグのコースが少なくともそれぞれ2コース含まれていることになっている。コースの幅は2～20m位で、テープまたは障害物をもってコースの境界とする。

ルールは非常に簡単で、スタート地点からゴールまでの打数を数え、12コースのトータルで勝敗を決める。

ボールがコースから外れたり(OB)、池に入ったりした場合はペナルティとして1打加算される。

打法は基本的には自由であるが、ゴルフのスイングの要領で打つのが一般的である。誰にでも取り組みやすいスポーツで、老若男女を問わず幅広く楽しむことができるものである。しかし、起伏に富んだコースや障害物を設けることにより、難易度、競技性、娯楽性も倍増する奥の深いスポーツである。

本文においては、その木球の第1回世界大会出場の記事を交えながら生涯スポーツとしてのニュースポーツ「木球」の一側面を紹介することとする。

2. 第1回木球世界大会出場

① 世界大会出発まで

周教授が初講習のために福島市を訪れた1998年12月、その時初めて木球の世界大会が1999年5月に台湾で開催されることを知らされた。その時は講習会で初めて木球の用具に触った私であったが、世界大会出場という期待で胸が高鳴ったものであった。

周教授が帰国して間もなく、台湾で木球の大会があるので招待したいとの連絡が入り、師走も押し迫った12月25日、3泊4日で木球の視察のため台湾に飛んだ。

木球の大会の様子やそのプレーぶりを初めて目にして、「ゴルフに似ている、しかしなんと素朴で心をなごませてくれるスポーツであろう」と感じた(写真3)。

用具の簡便さ、コースの広さ、老若男女を問わないスポーツはまさしく現代の生涯スポーツには最適であると確信し、同時に日本でも普及させることが可能であると実感した。



写真3

台湾木球大会

日本に戻り、さっそく近所のソフトボール仲間に声をかけ、体験してもらった。「面白い」の一言で、私を含めて4人の世界大会出場者が決定した。勿論、予選なしの日本代表である。こんなチャンスは二度とないかもしれないとの思いがあった。

折角の世界大会への招待、私達4人だけではもった

いないということで、それぞれが参加希望者を捜すこととなった。最終的に男性13名、女性1名の計14名が日本代表として第1回木球世界大会に参加することになった(参加者:阿部幸七、阿部稔也、阿部洋二、新谷崇一、五十嵐俊道、大河原政夫、尾形勉、菅野孝志、今野剛光、平野泰宏、増子弘文、三浦喬子、山上紀代志、渡部祐一)。

練習を始めたのは用具が揃ってからの4月になってからである。台湾での木球大会の視察で得た知識に頼りながらの練習であった。呼びかけたメンバーがそれぞれ練習する過程で体得した技を教授し合って、私達なりの木球の技術を作り上げていったのである。この技術が世界大会に通用するか否かは問題ではなく、参加するにあたってどれだけ技量を発揮できるかを目標とした。

そして、4月23日に木球世界大会出場結団式を行い、その後も練習を重ねる傍ら、福島市長表敬訪問、そして激励金授与、福島県知事表敬訪問を果たした。日本初のニュースポーツの紹介が福島県からということで、県や市の対応も好意的であった。県内普及への第一歩という手応えが感じられ、メンバーの士気も高まった。

先発組として5月26日、27日に台北で開催される「1999 International Woodball Conference and Workshop」に参加するため、5月25日羽田発中華航空C I 17便で私と阿部稔也氏の二人がフライトした。

後発組は5月27日に羽田を出発した。メンバーの仕事をやりくりしての大会出場の意気込みは、余暇活動としての生涯スポーツの普及に明るい兆しを感じさせるものであった。

② 研修会初日(5月26日)

第一日目は午前6時30分モーニングコール、7時朝食、7時30分ホテル出発でスタートを切った。研修会場である台北県立新莊体育場へはバスで向かったが、ラッシュアワーにぶつかったため、会場到着まで約1時間ほどかかった。車中ではシンガポールの選手団と同席し、シンガポール木球協会の会長 Joseph Lee 氏とお互いの国における木球の普及状況などについて片言の英語で話し合った。日本では始まったばかりの木球だが、シンガポールでは既に大会を数回開催しており、かなり普及している様子であった。

到着した台北県立新莊体育場は陸上競技場、野球場、多目的広場、テニスコート、屋外バスケットボールコート、野外ステージ、研修室からなっており、研修会はその研修室で行われた。

研修会には台湾はもとより、マレーシア、タイランド、シンガポール、香港、ポーランド、エストニア、スウェーデン、ハンガリー、イタリア、フィンランド、クロアチア、ベルギー、イギリス、インドネシア、マカオから約130名が参加していた。

受付を済ませ、9時10分からオープニングセレモニーが始まった。台湾木球協会理事長翁明輝氏の挨拶に始まり、来賓挨拶が続き、コーヒーブレイクの後、さっそく研修会に入った。この日の午前中の研修会では木球の沿革、特徴など、木球についての知識を深める講義を受けた。

昼食後は世界大会の会場となる多目的広場を視察した（写真4）。



写真4 新莊体育場多目的広場

多目的広場は芝生で覆われ、緩やかな起伏があり、木々が植えられてあった。これらの樹木がコースにおける障害物として利用されるとのことだった。

視察を終えてから、各国選手団は中正記念堂等の市内ミニ観光をし、その後翁理事長所有の木球専用コースである後花園で木球の練習を行った。私を含む各国代表者は行政院体育委員会、台湾オリンピック委員会を表敬訪問した後、後花園で30分ほど練習に加わった（写真5）。



写真5 台湾オリンピック委員会表敬訪問

ウェルカムパーティーは夕方6時半より青青農場という屋外レストランで開かれ、各国からの参加者は夕食を取りながら懇親を深めた。

まだ2日目というのに、あらゆることが初めての体

験のためか、疲れはててホテルに戻り、すぐに眠りに就いた。

③ 研修会2日目（5月27日）

雨音で目が覚めると、午前3時半であった。前夜の天気予報では一日中雨とのことであった。翌日の大会の天気やコースコンディションが気にかかった。

慌ただしく朝食を済ませて、前日と同様バスで研修会場へと向かった。午前中の研修は木球のルールとテクニックおよび指導法の講義と実技であった。ルールの講義においては、既に木球の普及が進んでいるマレーシアやシンガポールから質問、意見が出され、熱気に溢れた議論が展開された。私も、マレットへの加工についての質問をし、熱い議論の輪に加わったような気分を味わった。

コーヒーブレイクをはさんで、後半にはマレーシアチャンピオンの郭氏による木球の技術指導があった。さすがにチャンピオンとあって、参加者は郭氏の一挙手一投足に見入っていた。

午後は世界大会の会場で実践の予定であったが、雨のため予定を変更してフリータイムとなった。私と阿部氏はホテルに戻り、夕方到着する後発組との合流コンパのために買い出しに行った。

午後3時過ぎ、後発の日本選手団を中正空港まで迎えに行った。税関から出てきたメンバーは赤い顔をして意気軒昂、「明日から世界大会」という緊張感は微塵も感じられなかった。午後7時頃ホテルに到着し、既に夕食をしている参加国のメンバーに交って夕食を済ませた。その後、メンバーだけで大会のための打ち合わせをした。

外は雨が降り続き、天気予報は明日も雨ということで、憂鬱な気分を胸に眠りに就いた。

④ 世界大会開会式および大会初日（5月28日）

外は昨夜来の雨が降り続いていた。天気予報も「終日雨、時に強く降る」であった。緊張すらも流され気味になる雨ではあったが、世界大会出場の喜びを胸に、この日もバスで大会会場へと向かった。

オープニングセレモニーでは21の参加国のプラカードの後ろに各国選手団213名が整列し、和やかな雰囲気の中にも厳粛さを保ちつつ、第1回という記念すべき式が執り行われた。翁理事長の開会宣言で始まり、行政院体育委員会主任委員、台北県長等の挨拶と続きセレモニーは閉会した（写真6）。

いよいよ大会開始である。選手は4グループに分けられ、第1グループは雨の中を10時にスタートした。

日本選手団は第3グループであり、午後1時半のスタートであった。それまでの時間を利用して、空き地で練習をしながら緊張をほぐしていた。



写真6 開会式会場

昼食後、いよいよスタート。スターティングメンバーの確認を受け、スタート地点へ向かった。私はタイランドの男性と女性の3人組であった。午前中の雨も上がり、コースコンディションはまあまあである。

最初のスタートは第4コースである。このコースは左ドッグレッグのショートコース、第1打の止め場所によっては、やっかいなコースである。世界大会の第1打、打席に立った時、意外にも緊張していなかった。なぜだろうと考える間もなく、第1打を振り下ろした。気楽な気持ちで打てたためか、ナイスショットであった。そこまでは良かったが、やはりウイケットの近くでは手間取り、思うようにはいかなかった(写真7)。



写真7 世界大会初日

プレーも後半になると天気も完全に回復し、薄日が射すと汗ばむくらいであった。いよいよ最終コース、幅が広いロングコースである。最後だから思い切って打って好スコアをとる欲が脳裏を横切った。案の定、結果はゴルフと全く同じ、手前のOBラインを超えてOBとなってしまった。後味の悪い最終コースであった。私のスコアは65打、50台後半で上がりたいと思っていたのだが思うようにはいかなかった。これがスポーツであり、また実力でもあるということだ。

日本チームの最高は阿部稔也氏の54打、Aチームは22チーム中13位、Bチームは19位であった。しかし、

本拠地台湾からは「最高の出来です」と賞賛された。翌日はまた趣の異なる面白いコースとあって楽しみであった。

夜には8時半からアジア木球連盟設立準備会があり、台湾、マレーシア、タイランド、シンガポール、香港、マカオ、日本の7カ国が集まった。議論は紆余曲折のまま11時過ぎまで続き、最終的に私が意見を出し、現在国単位で木球協会を持っている台湾、マレーシア、シンガポール、香港の4カ国でとりあえず立ち上げ、他はチーム(個人)として参加するということが決着した。

部屋に戻って、待っていたメンバーと30分ほど飲んで眠りに就いた。翌日の晴天が確信された。

5 大会2日目(5月29日)

少し風はあるがさわやかな晴天であった。6時30分モーニングコール、7時朝食、7時30分出発。いつも通りのスケジュールに従って早目の行動をとる私達日本人。ところが、毎回出発は必ず30分程度遅れるのだ。日本選手団は時間通り集合するが、他国の選手団は必ず誰かが遅れ、出発が遅延することになる。お国柄の違いであろうか。30分ほどの遅れでは誰もカリカリしない。「時間通り」にこだわる私達はむしろ異質な存在のようであった。

後花園に着いてさっそく練習をしようと思ったが、用具の到着が遅れ、スタート直前まで待たされてしまった。結局練習しないままのスタートとなってしまった。



写真8 世界大会2日目

後花園のコースは翁理事長所有の木球専用のコースであるが、非常に狭いうえにアップダウンがあり、かなりの難関コースである(写真8)。しかし、この日の組み合わせは日本人同士であったので、お互い心強く感じられ、リラックスすることができた。とはいえ、審判員が一人つき、国際ルールに則っての世界大会であることには変わりはない。

難関コースとあってOBが続出し、思うようにスコ

アが伸びない。ある登りの左ドッグレッグのコースでは、登り坂が二段になっており、一段目にある直径1メートル位の平地に一度乗せてから、次の平地にあるウィケットを狙うといったコースである。この1メートル位の平地に乗らなければ、ボールが転がり落ちてきてOBとなり、これを繰り返すと3打のところから7打、9打となるという超難関コースであったが、それ故に木球の醍醐味を味わうこともできた。

さわやかな風が心地よい好天のもとで、木球の面白さを満喫した大会2日目であった。2日目の成績は楽しさが先行して忘れてしまったほどだ。

遅い昼食を済ませ、各国選手団は後花園の近くにある故宮博物館を見学してホテルに戻った。夕食を済ませた後、私達メンバーは私の部屋で大会2日目のあれこれを酒の肴にして、大いに盛り上がった。

皆が引き上げて、翌日は国際木球連盟設立準備会の会議に出席という役割があり、他のメンバーと一緒に観光ツアーに行けないことが淋しく思われたが眠りに就いた。

6 閉会式（5月30日）

午前6時半モーニングコール、7時朝食、7時30分見送りのためホテルのエントランスロビーに集合した。外は前日と同様さわやかな晴天であった。この日も予想通り、バスは7時30分には出発できなかった。しかし、それが幸いすることになった。

夕方3時半より国際木球連盟設立準備会があるため、私をはじめ各国代表はメンバーとは別行動になっていた。出発が遅れて皆がモタモタしているとき、タイランドの若い会長が「会議のため私はメンバーとほとんど一緒にいられない、今日のツアーもそうである。帰りを早めることにして一緒に行けないだろうか？」と提案したのである。私も全く同感であった。



写真9 陽名山の噴火口

その願いが聞き入れられて、私は慌てて部屋に戻り、バッグに、タオルと歯ブラシそして缶ビールを詰め込み、5分でバスに飛び乗った。メンバーと同一行動を

とることになり心がなごんだのは言うまでもない。

一行は台北にある陽明山の噴火口を見学して（写真9）、台湾北端にある野柳を観光した（写真10）。野柳は観光地と港町からなる。東シナ海に突き出た岬は、奇岩に覆われた神秘的で美しい海岸で、大会の疲れが癒される思いだった。



写真10 野柳海岸

3時15分頃ホテルに到着し、15分でスーツに着替え、会議に参加した。

会議は先にも述べた通り、国際木球連盟設立に向けての決議案の承認と、会長・副会長の選出だった。私はオブザーバーというつもりで参加していたので、あまり会議の内容に耳を傾けて聞いてはいなかった（そのため英語での会話は耳を素通りしていた）。決議案は拍手で承認された。

その後の議事も正確に内容を把握していなかったのだが、国名と人名が読み上げられ始め、「Third Japan ARAYA」という声が耳に入り、拍手が起こった。皆がこちらに注目していた。一瞬何が起きたのか戸惑ったのはいうまでもない。

「Forth Croatia Srecko Mavrek-Lucky」と読み上げられると、会場全体から拍手が起こり何かが決まったのだという雰囲気が感じられた。

続いて、Firstから挨拶が始まった。木球世界大会の持ち回りでも依頼されたのであろうかと想像をめぐらした。私の番になったが、内容が解らないので「I am sorry. I can not speak English.」でお茶を濁しておいた。

遅れて来た周教授に何の拍手だったのかと訊ねたところ、「副会長の選出です」という答えが返ってきた。国際木球連盟への参加は、一昨日、私が提案したチーム（個人）単位でということが取り上げられたばかりであった。国単位での参加だけでなく、個人単位での参加を可能にしたことで、はからずも私は自分で国際木球連盟第3副会長就任への道を開いてしまったということなのか。光栄と思いつつも、今後の責任の重さ

がずっしりと肩にのしかかる思いだった。会議の席で隣に座っていたシンガポールの Joseph Lee 氏の「Congratulation!」の意味を理解するとともに、日本という国における木球の普及に寄せる協会の期待に、気持ちが引き締まる思いがした。

それにつけても会議でのやりとりを理解し、参加できる英語力を身につけなくてはならないと、内心忸怩たるものがあった。

会議を終えて、小雨の中を私達はフェアウェルパーティーの会場へと向かった。パーティーでは様々なショーが披露されたが、参加者も舞台上で歌ったり、踊ったり楽しんだ。日本のメンバーも舞台上上がり、皆と興じた(写真11)。パーティーでは記念品の交換も行われた(写真12)。



写真11 フェアウェルパーティー



写真12 記念品交換

また同時に表彰式も行われたが、日本選手団は蚊帳の外といった感じであった。次回に期待しようと皆で誓い合ったのはいうまでもない。

最後に、国際木球連盟の設立が提案され、大きな拍手のもとに可決された。同時に、会長に台湾木球協会理事長翁明輝氏、副会長にマレーシア木球協会会長郭増嘉氏、オーストラリアから Ting-Kuang Wu 氏、クロアチアから Srecko Mavrek-Lucky 氏、日本から私の4人が選出され、それぞれ承認された。

これで第1回木球世界大会の行事予定は全て終了した。収穫の多い世界大会であったが、大きな宿題を課せられたことも確かであった。木球の我が国全域への

普及が私の新しい任務なのだとの深い使命感が私の胸に刻まれた。

5月31日、私達は中華航空 CI 100 便で台湾を離れた。機内では滞在中の緊張から開放されたせいか、皆リラックスして世界大会の話で盛り上がっていた。日本に戻ったら、是非木球を普及させようという強い思いはメンバーの共通した願いだった。

3. 生涯スポーツとしての「木球」

① 木球の普及活動

世界大会からの帰国後、地元マスコミ各社に結果報告をした。報道を通して多くの人に木球を知ってもらいたかった。反応はすぐにあった。

まず、6月7日、NHK 福島の夕方6時からのニュースのスポーツコーナーでインタビューを受けた。3月20日に福島のあづま総合運動公園で開かれた木球講習会のビデオをはさみながら、木球の成り立ちやルール、世界大会の様子やこれからの抱負など約6分放映された。この出演に対して、さっそく視聴者から木球の問い合わせなどがあり出足好調といったところだった。

8月22日には、8月27日から29日までマレーシアで開催される第1回アジア木球大会出場のための練習風景と抱負などが福島テレビのニュースで放映された。

また、9月7日にはラジオ福島で木球についての紹介を録音し、1週間後に放送された。ラジオを聴く人は少ないと思っていたが、「カーラジオで聴いたよ」という電話が入り、メディアの影響の大きさを感じた。

マスコミによる普及ばかりではなく、私達は時間の許す限り講習会に出向いた。

まず、7月20日、福島市蓬萊地区で蓬萊公民館主催の木球教室において地域の人々に実際に木球を体験してもらった。あちらこちらから歓声が聞こえ、なかなかの好評ぶりであった。

8月1日は福島市信陵地区で地区体協主催のスポーツフェスティバルのニューススポーツコーナーで木球の体験をしてもらった。OBや樹木による障害物を設けたりしたので、体験者は一見簡単そうなのに奥の深いスポーツであると感嘆していた。

8月21日には福島市の体育指導委員約30名を対象に講習会を開催した。この日は、小学校のグラウンドで行ったため、芝生ではなかったのが、ボールがどれくらい転がるのか見当がつかなかったが、木球のルール、技術等を学んでもらった。やはり、木球は芝の上で行

うのが最適であると実感した。

9月5日は初めて福島市を離れて講習会を開催した(写真13)。場所は原町市である。原町市に住む72歳の神谷氏から依頼された。神谷氏は以前ゲートボールを行っていたが、ゲートボール人口の減少により、何かそれに代わるスポーツはないかと探していたところであり、報道を通して関心をもたれたようだった。講習会には約60人ほどの市民(高齢者が中心)が集まり、「ゲートボールとはひと味違う、面白い」と言いながら木球に取り組んでいた。講習会の成果だと思われるが、今では原町市は福島市に次ぐ木球人口を抱える市となっている。



写真13 原町市木球講習会

福島市の補助金によるコミュニティスポーツ振興事業において、福島市杉妻地区で10月14日から毎週木曜日の3回、10月15日から17日の3日間福島市蓬萊地区で木球教室が開催され、着実に木球が市民の間に浸透しているのが感じられた。

さて、話は前後するが、木球の普及の傍ら私達は仕事の関係で何人が出場できるかどうか不確定であったが、8月27日から29日の3日間マレーシアで開催される第1回アジア木球大会、第3回マレーシア木球大会に向けて練習を重ねていた。結果的に私を含めて4人が両大会に出場できることになった(写真14)。



写真14 マレーシア木球コース

両大会が開催された、マレーシアのLANJUT Golden Beach Resort地の木球コースは言葉に表現できないほどの素晴らしいコースであった。ここでプレー

したならば誰もが木球の虜になることは間違いないと思われるほどだった。

2 福島県木球協会の設立

世界大会出場の興奮も冷めやらない6月6日、世界大会出場の慰労会を行った。その席は、大会の思い出話は勿論のこと、早く木球協会を作らねばという話題でもちきりであった。

日本木球協会設立を想定しての福島県木球協会設立である。専用コースを作ることも考えなければならぬわけで、全国的な活動展開のための協力を惜しまない人物をトップに置きたいと考えた。あれこれ皆と相談した上で、私達有権者の代表である代議士というのでもいいかもしれないということになった。

協会設立の経験があり、世界大会出場のメンバーでもある尾形勉氏と7月3日、事前にアポイントを取っておいた衆議院議員佐藤剛男氏の選挙事務所を訪問した。木球の説明、協会設立の趣旨等を話して会長委嘱の願いをした。返事は「喜んでご協力しましょう」という即答であった。あまりのあけなさに拍子抜けした感じの私達であったが、ともかくトップが決まったので、協会設立に向けて走り出すことができると安堵した。

しかし、ふたつ返事で引き受けてもらえたことで、不安も感じた。正直のところ、木球人口を票田としてとらえられては困るとの思いが浮かんできた。しかし、スポーツマンシップを理解してもらえば、きっとお互いに良き信頼関係が築けるはずだと思い直し、迷いをフッ切ることにした。

会長は早くから決定したが、7月、8月は多忙をきわめ、設立に向けての会議を開催することができず、実際に取りかかったのは9月に入ってからであった。設立準備委員会は世界大会出場者全員で構成した。

福島県木球協会設立日を10月17日と決定し、まず福島県木球協会の規約作り、事業計画、設立記念パーティー、設立記念大会、そして副会長、理事長、理事、事務局長の人選と、決定していかなければならないことが山積し、会長決定のようにスムーズには運ばなかった。

副会長の人選においては、福島県を網羅するように考慮した準備委員会側の考えと、福島市内を固めるという会長の意見とで多少のズレがあったが、両者の考えを含んだ人選となった。その結果、福島、会津若松、いわきの各市から選出された。

これらの大仕事を終えて、いよいよ10月17日、記念

すべき福島県木球協会設立の日となった(写真15)。当日は、台湾より翁理事長代理としてご子息の PER-RY WENG 氏、周教授、マレーシアよりマレーシア木球協会会長、アジア木球連盟会長郭増嘉氏が出席し、国際色豊かな設立の会となった。



写真15 福島県木球協会設立

また、台湾木球協会より記念として木球用具50組が贈呈された。翁理事長をはじめとして、設立に対して台湾側が喜んでくれていることを実感した。同時に福島県木球協会より台湾大震災に対して義援金を手渡して、お見舞いの気持ちを表した。

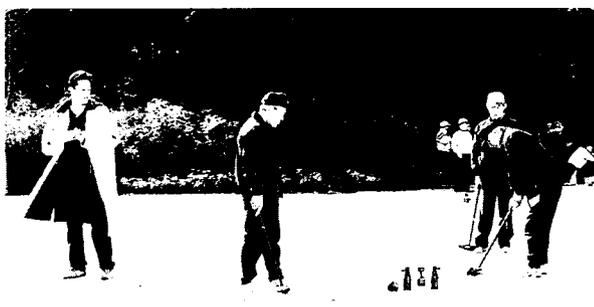


写真16 福島県木球協会設立記念大会

来賓の祝辞等をいただいた後、望木昌彦県議会議員の乾杯で祝宴に入った。出席者は総勢で70人となり、盛大にその門出を祝した。

一方、11月28日に開催された日本初の福島県木球協

会設立記念大会には約60名の参加者があり、晩秋の陽射しを浴びながら行われた(写真16)。会場は福島市郊外の「四季の里」で行われ、トリッキーなコースに苦戦しながらも、初大会とあって出場者は真剣な中でも和やかにプレーをしていた。

世界大会出場、アジア大会出場、そして福島県木球協会の立ち上げと、得難い体験もし、念願も果たし、慌ただしい1年となった。12月18日は1年の労をねぎらい、次年度を期して、会長以下木球を愛する人々とともに忘年会を開いたことも記しておきたい。

4. おわりに

1999年は木球にとって、2000年、そして21世紀に向けての華々しいスタートの年であった。私にとっては世界大会出場、アジア大会出場を果たし、木球協会設立、木球の普及と木球さんまいの年であった。

しかし、まだスタートは切られたばかりである。2000年にはシドニーにおいて第2回世界大会開催、そして、第1回アジア学生選手権が台湾で開催される予定である。第2回アジア大会は2001年、タイランドでの開催が決定している。

今までは、とにかく参加することができればよいと形を整えてきた。しかし、これからは中味を充実させなければならない。木球を福島県全域へ浸透させ、さらに日本全国へと、普及活動を推進させていかなければならない。同時に、日本木球協会の設立、世界大会の日本開催に向けて精力的に働きかけていくことが必要だ。

生涯スポーツとしてふさわしいと確信したニュースポーツ「木球」を、国民の生涯スポーツとして定着させるまで、私には「前進あるのみ」である。